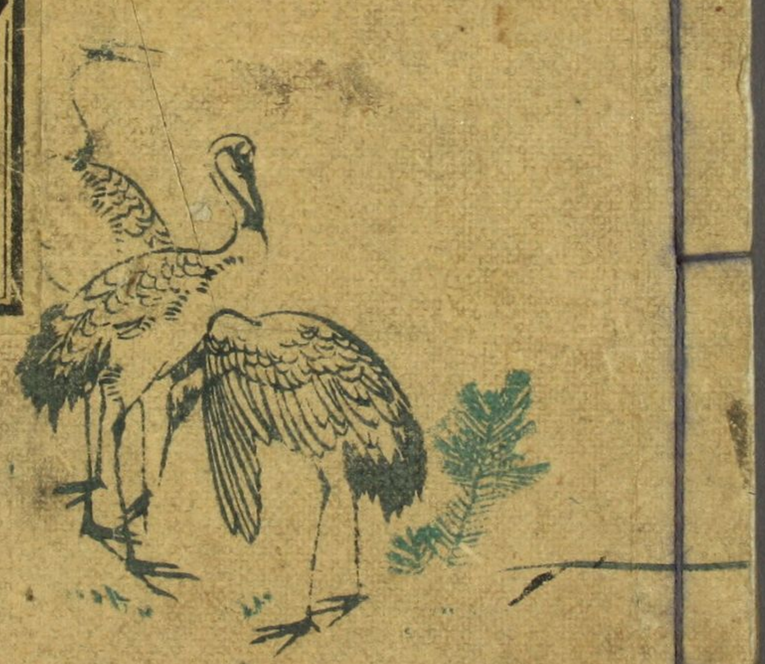
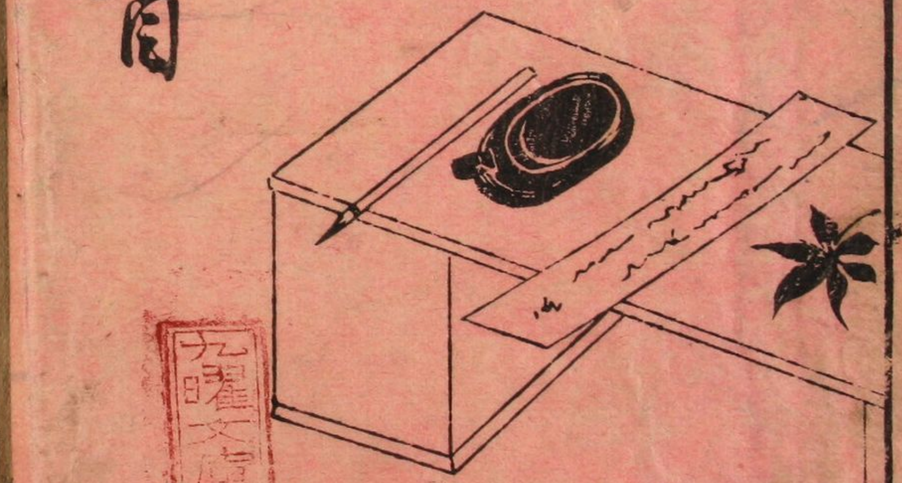
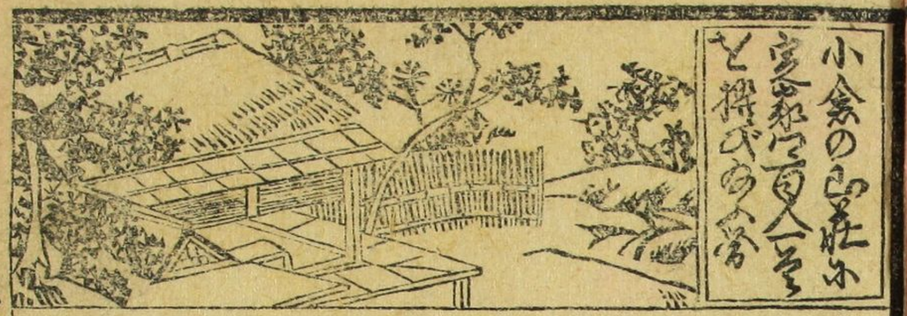
今様源氏

小倉百人一首



小倉百人一首





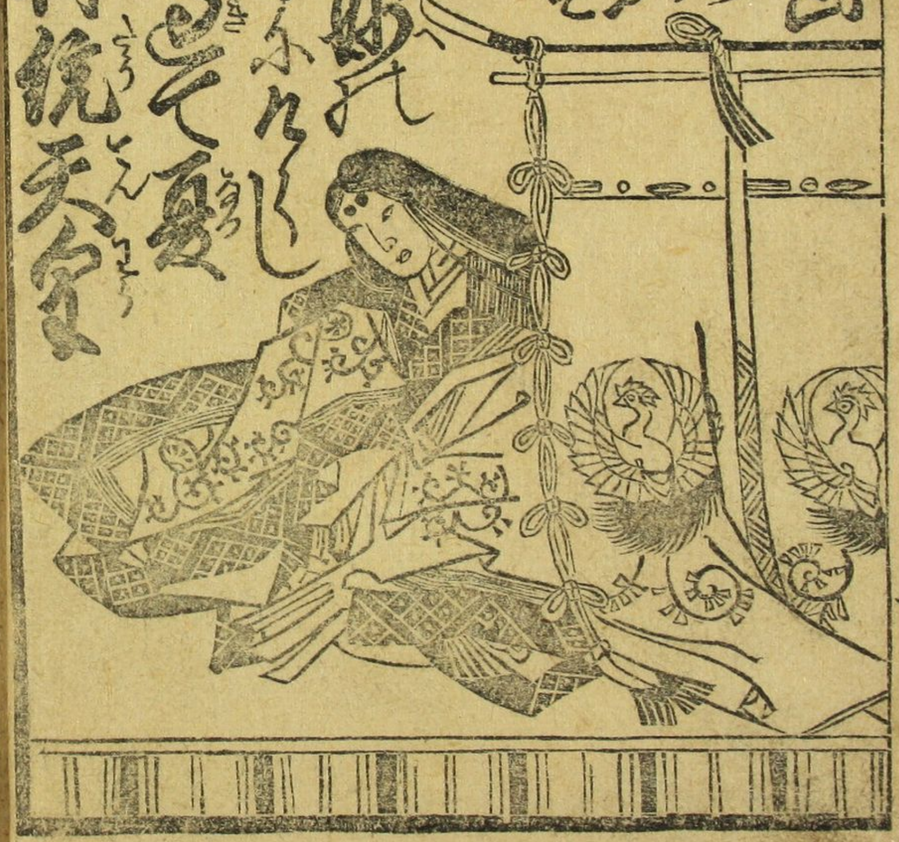
小倉の山荘の
障子和らげ
と掛けの分

天智天皇

秋の田の
苅穂の庵の
苫をあらみ
我が衣手は
露に濡れつつ

百人一首の内

かぐやま
天の
香具
白妙
きふふれる
雪の
持統天皇



百人一首の内

柿本人麿
山鳥の
尾の
しだり尾の
ながながし夜を
ひとりかも寝む

百人一首の内

奈良の都の八重桜
今日九重に
匂ひぬるかな
伊勢大輔

百人一首の内

世の中は常にもがもな
渚こぐ
あまの小舟の
綱手かなしも
鎌倉右大臣

百人一首の内

小倉山
峰の紅葉
心あらば
今一度の
みゆき待たん
貞信公

百人一首の内

みかの原
わきて流るる
いづみ川
いつ見きとてか
恋しかるらん
中納言兼輔

百人一首の内

山里は
冬ぞさびしさ
まさりける
人目も草も
かれぬと思へば
源宗于朝臣

百人一首の内

心あてに
折らばや折らん
初霜の
おきまどはせる
白菊の花
凡河内躬恒

百人一首の内

有明の
つれなく見えし
別れより
暁ばかり
憂きものはなし
壬生忠岑

百人一首の内

朝ぼらけ
有明の月と
見るまでに
吉野の里に
ふれる白雪
坂上是則

百人一首の内

山川に
風のかけたる
しがらみは
流れもあへぬ
紅葉なりけり
春道列樹

百人一首の内

ひさかたの
光のどけき
春の日に
しづ心なく
花の散るらん
紀友則

百人一首の内

誰をかも
知る人にせん
高砂の
松も昔の
友ならなくに
藤原興風

百人一首の内

人はいさ
心も知らず
ふるさとは
花ぞ昔の
香に匂ひける
紀貫之

百人一首の内

夏の夜は
まだ宵ながら
明けぬるを
雲のいづこに
月宿るらん
清原深養父

百人一首の内

白露に
風の吹きしく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉ぞ散りける
文屋朝康

百人一首の内

忘らるる
身をば思はず
誓ひてし
人の命の
惜しくもあるかな
右近

百人一首の内

浅茅生の
小野の篠原
しのぶれど
あまりてなどか
人の恋しき
参議等

百人一首の内

しのぶれど
色に出でにけり
我が恋は
物や思ふと
人の問ふまで
平兼盛

百人一首の内

恋すてふ
我が名はまだき
立ちにけり
人知れずこそ
思ひそめしか
壬生忠見

百人一首の内

ちぎりきな
かたみに袖を
しぼりつつ
末の松山
波こさじとは
清原元輔

百人一首の内

逢ふことの
絶えてしなくは
なかなかに
人をも身をも
恨みざらまし
中納言朝忠

百人一首の内

あひ見ての
後の心に
くらぶれば
昔は物を
思はざりけり
権中納言敦忠

百人一首の内

あふ事の
なみだ川に
身をなげば
流れて名をも
とどめざらまし
中納言義孝

百人一首の内

あしびきの
山鳥の尾の
しだり尾の
ながながし夜を
ひとりかも寝む
柿本人麿

百人一首の内

田子の浦に
うち出でて見れば
白妙の
富士の高嶺に
雪は降りつつ
山部赤人

百人一首の内

奥山に
紅葉ふみわけ
鳴く鹿の
声聞く時ぞ
秋は悲しき
猿丸大夫

百人一首の内

かささぎの
渡せる橋に
おく霜の
白きを見れば
夜ぞふけにける
中納言家持

百人一首の内

天の原
ふりさけ見れば
春日なる
三笠の山に
出でし月かも
安倍仲麿

百人一首の内

わが庵は
都のたつみ
しかぞすむ
世をうぢ山と
人はいふなり
喜撰法師

百人一首の内

花の色は
うつりにけりな
いたづらに
わが身世にふる
ながめせしまに
小野小町

百人一首の内

これやこの
行くも帰るも
別れては
知るも知らぬも
逢坂の関
蝉丸

百人一首の内

わたの原
八十島かけて
こぎ出でぬと
人には告げよ
あまの釣舟
参議篁

百人一首の内

天つ風
雲の通ひ路
吹きとぢよ
乙女の姿
しばしとどめむ
僧正遍昭

百人一首の内

筑波嶺の
峰より落つる
みなの川
恋ぞつもりて
淵となりぬる
陽成院

百人一首の内

陸奥の
しのぶもぢずり
誰ゆゑに
乱れそめにし
われならなくに
河原左大臣

百人一首の内

君がため
春の野に出でて
若菜つむ
わが衣手に
雪は降りつつ
光孝天皇

百人一首の内

立ち別れ
いなばの山の
峰に生ふる
まつとし聞かば
今帰りこむ
在原行平朝臣

百人一首の内

ちはやぶる
神代も聞かず
竜田川
からくれなゐに
水くくるとは
在原業平朝臣

百人一首の内

住の江の
岸による波
よるさへや
夢の通ひ路
人目よくらむ
藤原敏行朝臣

百人一首の内

難波潟
みじかき芦の
ふしの間も
逢はでこの世を
過ぐしてよとや
仁徳天皇

百人一首の内

わびぬれば
今はた同じ
難波なる
みをつくしても
逢はむとぞ思ふ
元良親王

百人一首の内

今来むと
いひしばかりに
長月の
有明の月を
待ち出でつるかな
素性法師

百人一首の内

吹くからに
秋の草木の
しをるれば
むべ山風を
嵐といふらむ
文屋康秀

百人一首の内

月見れば
ちぢに物こそ
悲しけれ
わが身ひとつの
秋にはあらねど
大江千里

百人一首の内

このたびは
幣もとりあへず
手向山
紅葉の錦
神のまにまに
菅家

百人一首の内

名にしおはば
逢坂山の
さねかづら
人に知られで
くるよしもがな
三条右大臣

百人一首の内

小倉山
峰のもみぢ葉
心あらば
今一度の
みゆき待たん
貞信公

百人一首の内

みかの原
わきて流るる
いづみ川
いつ見きとてか
恋しかるらん
中納言兼輔

百人一首の内

山里は
冬ぞさびしさ
まさりける
人目も草も
かれぬと思へば
源宗于朝臣

百人一首の内

心あてに
折らばや折らん
初霜の
おきまどはせる
白菊の花
凡河内躬恒

百人一首の内

有明の
つれなく見えし
別れより
暁ばかり
憂きものはなし
壬生忠岑

百人一首の内

朝ぼらけ
有明の月と
見るまでに
吉野の里に
ふれる白雪
坂上是則

百人一首の内

山川に
風のかけたる
しがらみは
流れもあへぬ
紅葉なりけり
春道列樹

百人一首の内

ひさかたの
光のどけき
春の日に
しづ心なく
花の散るらん
紀友則

百人一首の内

誰をかも
知る人にせん
高砂の
松も昔の
友ならなくに
藤原興風

百人一首の内

人はいさ
心も知らず
ふるさとは
花ぞ昔の
香に匂ひける
紀貫之

百人一首の内

夏の夜は
まだ宵ながら
明けぬるを
雲のいづこに
月宿るらん
清原深養父

百人一首の内

白露に
風の吹きしく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉ぞ散りける
文屋朝康

百人一首の内

忘らるる
身をば思はず
誓ひてし
人の命の
惜しくもあるかな
右近

百人一首の内

浅茅生の
小野の篠原
しのぶれど
あまりてなどか
人の恋しき
参議等

百人一首の内

しのぶれど
色に出でにけり
我が恋は
物や思ふと
人の問ふまで
平兼盛

百人一首の内

恋すてふ
我が名はまだき
立ちにけり
人知れずこそ
思ひそめしか
壬生忠見

百人一首の内

ちぎりきな
かたみに袖を
しぼりつつ
末の松山
波こさじとは
清原元輔

百人一首の内

逢ふことの
絶えてしなくは
なかなかに
人をも身をも
恨みざらまし
中納言朝忠

百人一首の内

あひ見ての
後の心に
くらぶれば
昔は物を
思はざりけり
権中納言敦忠

百人一首の内

あふ事の
なみだ川に
身をなげば
流れて名をも
とどめざらまし
中納言義孝

百人一首の内

あしびきの
山鳥の尾の
しだり尾の
ながながし夜を
ひとりかも寝む
柿本人麿

百人一首の内

田子の浦に
うち出でて見れば
白妙の
富士の高嶺に
雪は降りつつ
山部赤人

百人一首の内

奥山に
紅葉ふみわけ
鳴く鹿の
声聞く時ぞ
秋は悲しき
猿丸大夫

百人一首の内

かささぎの
渡せる橋に
おく霜の
白きを見れば
夜ぞふけにける
中納言家持

百人一首の内

天の原
ふりさけ見れば
春日なる
三笠の山に
出でし月かも
安倍仲麿

百人一首の内

わが庵は
都のたつみ
しかぞすむ
世をうぢ山と
人はいふなり
喜撰法師

百人一首の内

花の色は
うつりにけりな
いたづらに
わが身世にふる
ながめせしまに
小野小町

百人一首の内

これやこの
行くも帰るも
別れては
知るも知らぬも
逢坂の関
蝉丸

百人一首の内

わたの原
八十島かけて
こぎ出でぬと
人には告げよ
あまの釣舟
参議篁

百人一首の内

天つ風
雲の通ひ路
吹きとぢよ
乙女の姿
しばしとどめむ
僧正遍昭

百人一首の内

筑波嶺の
峰より落つる
みなの川
恋ぞつもりて
淵となりぬる
陽成院

百人一首の内

陸奥の
しのぶもぢずり
誰ゆゑに
乱れそめにし
われならなくに
河原左大臣

百人一首の内

君がため
春の野に出でて
若菜つむ
わが衣手に
雪は降りつつ
光孝天皇

百人一首の内

立ち別れ
いなばの山の
峰に生ふる
まつとし聞かば
今帰りこむ
在原行平朝臣

百人一首の内

ちはやぶる
神代も聞かず
竜田川
からくれなゐに
水くくるとは
在原業平朝臣

百人一首の内

住の江の
岸による波
よるさへや
夢の通ひ路
人目よくらむ
藤原敏行朝臣

百人一首の内

難波潟
みじかき芦の
ふしの間も
逢はでこの世を
過ぐしてよとや
仁徳天皇

百人一首の内

わびぬれば
今はた同じ
難波なる
みをつくしても
逢はむとぞ思ふ
元良親王

百人一首の内

今来むと
いひしばかりに
長月の
有明の月を
待ち出でつるかな
素性法師

百人一首の内

吹くからに
秋の草木の
しをるれば
むべ山風を
嵐といふらむ
文屋康秀

百人一首の内

月見れば
ちぢに物こそ
悲しけれ
わが身ひとつの
秋にはあらねど
大江千里

百人一首の内

このたびは
幣もとりあへず
手向山
紅葉の錦
神のまにまに
菅家

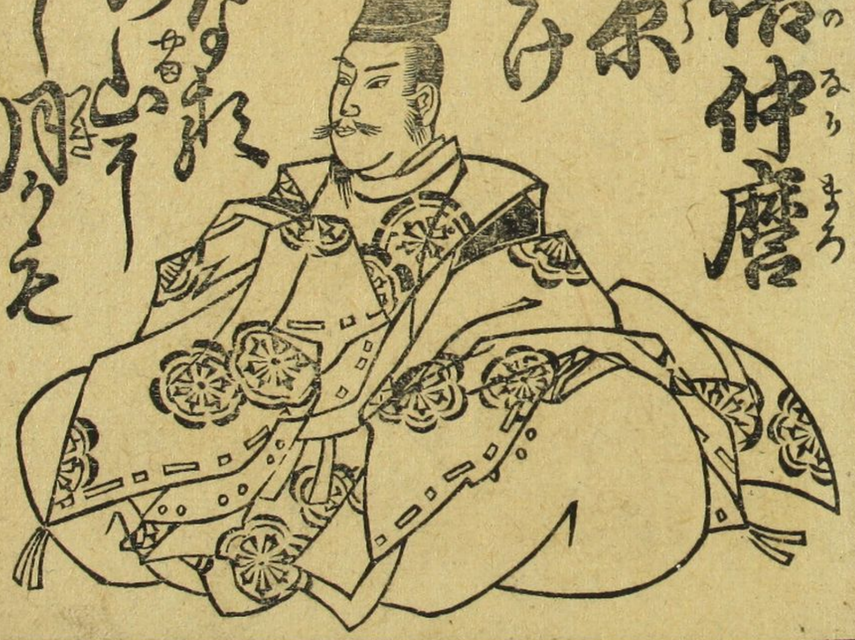
百人一首の内

名にしおはば
逢坂山の
さねかづら
人に知られで
くるよしもがな
三条右大臣

山べの赤人
見わたせば
うち出て
見るも
富士の高ね
かんなびに
わかくも
ふりつゝ
ゆきは
そのふる
ぞ
あはれ
とぞ
おもふ

猿丸大夫
奥山に
もみぢ
踏わけ
なく
鹿の
声きく時ぞ
秋は
かなしき

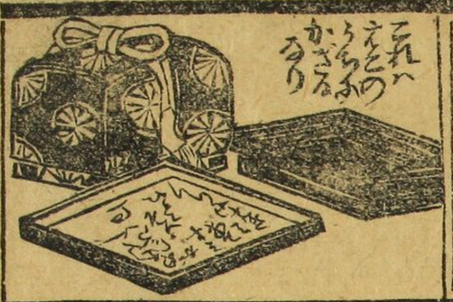
中納言家持



安倍仲麿

ゐろひそうろくぞめ
粉るどつるもその
てろそあつへれつり
。髭のみ藏前
うぞて人々さそそそを
ひくもむりの花
共の風こそれ眉の
かみみのつうまを
山のかもそそふたと
うち祇月のる
まもたとくり狂
びたぐ絵をみて
けをくかの
ようとさべ
。もとの改要
いうまのう

うもくとあるべ
それが見てとそあも
そのさ西や弁の
うの服そのしそ
かさそそのさるふ
れぐひとうり

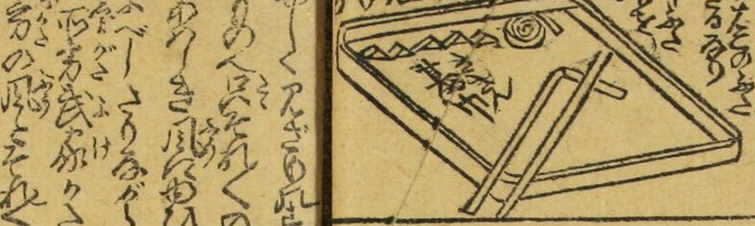


おとそぐりの
かぐりの図

小野の小町

○ねがひ事世のゆひやうまるぐ（まる）ゝにへどもこゝろをなどのあひてのくさりやそのそれがらづれその風ぞやーく

元結ながさのかぎり



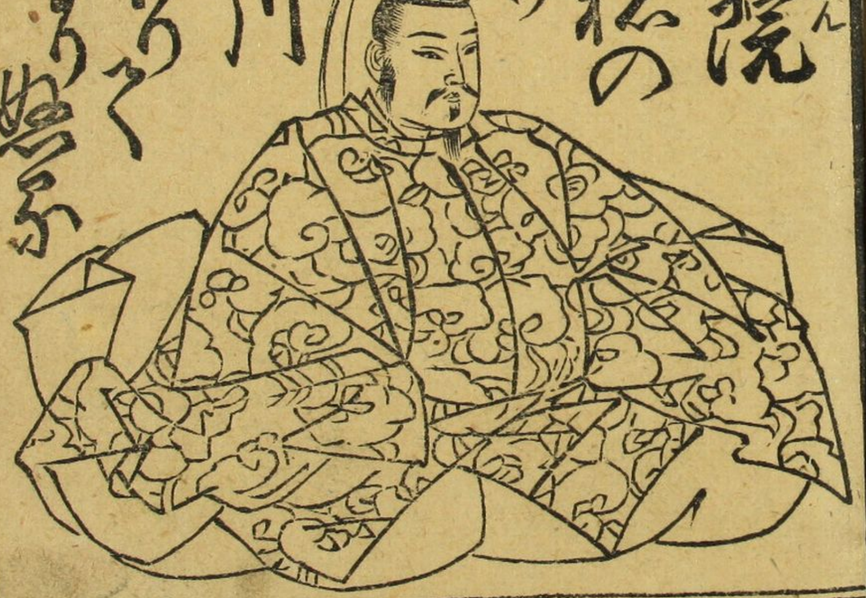
蟬丸

参議等

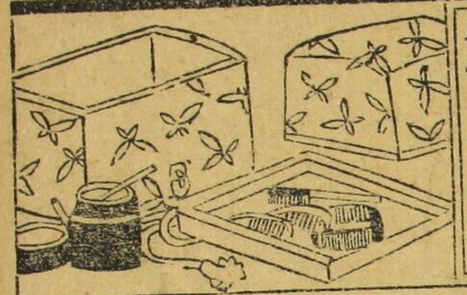
そうしんへん
僧心遍照

あま
天の
くも
雲の
うよひ
ち
風
ふき
吹
とどめ
とゞよる
ひ女の
そで
袖
ぬれ
濡
ぬれ
濡

やう
陽
せい
成
いん
院



ほくでん
北殿
ぎょう
行
かる
かる
くち
口
ずさみ
すさみ
ぬら
濡
くる
くる
ひと
人
なり
なり



そこ
底
ひく
低
かうべ
首
かたち
形
うつむ
俯
ぐち
口
ばかり
許
うつくしげ
美
なり
なり

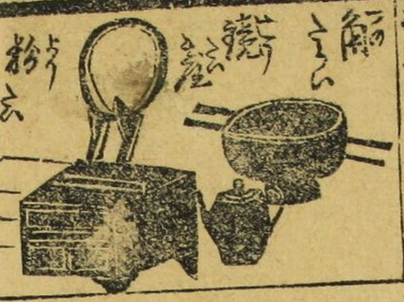
そうしんへん
僧心遍照

あま
天の
くも
雲の
うよひ
ち
風
ふき
吹
とどめ
とゞよる
ひ女の
そで
袖
ぬれ
濡
ぬれ
濡

やう
陽
せい
成
いん
院

ほくでん
北殿
ぎょう
行
かる
かる
くち
口
ずさみ
すさみ
ぬら
濡
くる
くる
ひと
人
なり
なり

そこ
底
ひく
低
かうべ
首
かたち
形
うつむ
俯
ぐち
口
ばかり
許
うつくしげ
美
なり
なり



○墨ぼかしまたは
ぼーこさえた白く
えんげつるハスバー
きのみのり物と
女のけ代ハホ朝
のあん人ぬさざれ
さる門ホらかゆてひ
整面ホ三女ハ化陸

河原左大臣

源融公

のぼり

ぞろ

誰田舎

みぐそ

われ

一ふそでと　びふく
一あびを　かり
一装束を　よろの物
一かやを　かちやろ
一蚊のこと　かひえ
一わらを　かるも
一ゆぐと　ゆかた
一ろうそくと　おひや
一茶を　うち共
一めしを　ぐご
一さけと　くそん
一みそを　さざん

光孝天皇

君が為

春の野に

いでて

わかな

つむ

我衣手に

雪は

中納言
いわう後
いかだの
乃
まつ
おも
今
こそ

在原業平朝臣
ちはやふる
神代も
きかず
たつた川
からくれなゐに
水くくるとは

百人一首

後京極摂政前太政大臣

ころもでは　つゆのとまやを　あらみ敵

伊勢

いせ

雅経

参議雅経

小野小町

僧正遍昭

蟬丸

喜撰法師

猿丸大夫

中納言家持

阿倍仲麿

山辺赤人

婚礼の図

元良の親王

わがぬれぬ
いまぞそでは
おもほゆる
なみだのかわく
ときのなきまで

素性法師

今こんと
いひしばかりに
長月の
有明の月を
まちいでつるかな

中納言敦忠卿立派なお屋敷でございまして
大勢の女房たちがかしずいております
ある夜のこと
敦忠卿が女房たちの中から
一人の女房をお召しになりました
女房たちは
いろいろとその女房のお化粧をしてやります

初ふりとけんと婚
礼ふくろとりの
とそをひくそ思
こまとけふりそ
ふくさろうこれ
ところの夏好
い春みかさるべ
そそろくい納戸
の戸をあけそぐ
まてまてまつれ
かさろべ一女房
の衣あくべふ
衣ろうふけて
かぶろ一上ま
いその衣ちく付
こりめふこりくて

文屋康秀（ぶんやのやすひで）

吹（ふく）からに
あきの
くさ
きの
あるれば
むべ山風を
あらしと
いふらん

五ツくけ三四ふう
こつろけべ一衣物
いこつもこつもある
べ一ふぐくけ
いろうより上世
たるべ一藤ろ六
女房のの主た
るぬ名ふとん
とかざろべ一のる
けせうのるろく
べ化粧ろをこと
もふ世みかさり
あくべ一びやうぶ
るといそのぬろ
べうびよく日ろあ
いせそよぬところふ

大江千里（おおえのちさと）

月見れば
ちぢ
もの
こそ
かなしき
我身（わがみ）
ひとつの
秋（あき）
にはあらねど

たべべーえんえんのかくのごー

○小そでをあつめてつまをとりのどくゆーて紬をえきれなりり

○むらひ小紬そのあかのくりむこの方よろこびてもりこれてもり小そでをーとうさ称更衣稽古とそりとあり是ひとをそこちるなりこちもりに偽あり

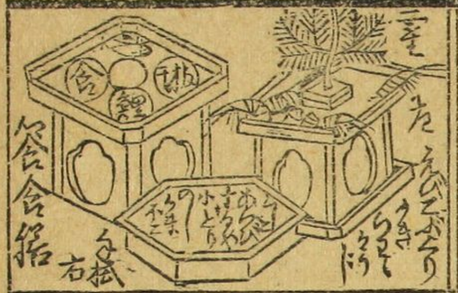
○濃うけこと

若家
きのそびへ
ぬさまも
とりあ
のみぢ
れ
ま
く

けこーそそうとも和のおとなりぐ門おお迎ろをおそその上ホうーとまれうこのお祝義とのべてそれよりこのくうの人うを祝ふより貝あらとこのつぎホえともおとるーき人うけとりつーまへ嫁より招ふ小そでひとくさ上下一具

三條宮
あのさる
とり
ちゝ称
うぐ
人よ
ま
れ

上野介一ぜんもり下り
あとへとちあよれ
一ぜん白紙のこと
刀一てうみとに持
ひろあてて出立
○よろう出立へ
下に白小そで
上小袖菱七白
小そでとをかり
のろうそくをかり
ろうそくをつきそ
ばあるやうにとぐ
てまち給ふすうえ
○まぬけのとびん
そろとをかり伝蔵
おろさ給ふやうにべ



三宝
えびこぶかり
うきとうふ
会合給の号
左揚右

あとより云向と庭
るやうにおしやう
ばをこゝにかくるやう
ほうそくたゞいふ
うやうにへ

二ばん目てがけ
ばんめ
次会食給の号

中納言
みかのはら
ろくそく
おがる
いづみ川
ほそ
ろん
高ろん

○三ツ亀ぜんぶ
とうの形ハ二を
ふうけ答のうぜん
せきまんうあからら
いの富三亜多
おき契乃へ
ミッ亜桃みひさ
けどうさうあく
平人ぶんけふ
おとし床のさり
まへーおまち上ろと
べー初まち上ろと
よめと化粧の号
へらざるひえりん
みとてくみひさ

百人

百人

りーきつけやさる
まうそまろみうけ
と歩ーるち上ろ
う男多あへさろ
あそまぬまのー
らんふうくりそ
ふそまのろまへー
さそあとーき女
房二人ふさうなる
乃へーくふそて下
ゆよさろ初ろ
二人逃よしさけ
をふそて下ゆさ
ぐさそ乃へ下の
男婦そふそへあ
むけ下おき沼を

ひさげおうつゝみ
出てみをとろゝ男
てんの上おうつゝむ
けふくゝれる
さけをおさけ
うゝおぼしゝ
ちゝしへきゝ
ふゝもてあそ
ゝうゝふ
ゝうゝべゝ
ゝうゝ
ゝうゝ
その
ゝうゝ
ゝうゝ
その上の

さそこの流れのよくてあそこのノホたろうさぶへーかそくなせホべくを○湯けんざんのあたりの気きそそもそこうらさそひろうとのまくホ出へーよめよりあろうとくめその外小あろうとホこそよそて指出そうのうのあるへー出そろ外

春道列樹

風のふくる

あづまもそ

おもふなりを

紀友則

久かたの

もろ

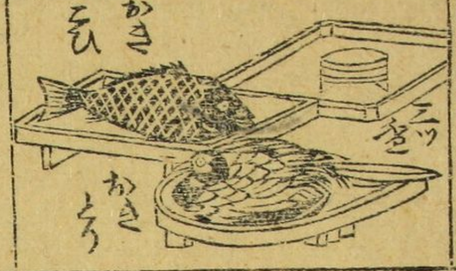
のどか

春の日み

ちる

春の花

ちるこん



らあぢへ酒と出しからふ仕様多くと結ぶといふいそり初一ぜんろくてかけ二ぜんあり扱人その号を

雁金屋典風

これ雁そろふ

人たち

さし

子初の

松九むつ

こと

なら

むつの

かみ

まあぢさんまそうと一ぜんのむ時酒そえ出ばこぜんなのにそのかつをけづりてへらさきてあるあぢさゞ一ぴきを三ぺんぢ切すまのこかうえびめしごとくしてよあぢさゝ身のこそぎ切ひとつ一ぜんへ盛りさそひきの吸九の出しさしみ初のごとく盛のこ

紀の貫之

人もいざ

ふるさと

あらむ

ぞ

ふるさと

とは

それだに

あらじ

清原深養父

夏の夜は
まだよひながら
あけぬるを
雲のいづこに
月やどるらむ

文屋朝康

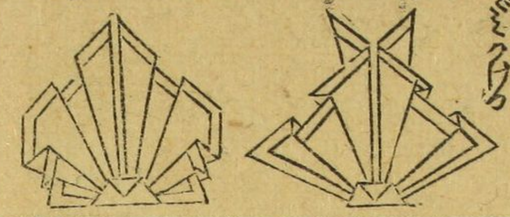
白露に
風のふきしく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉ぞちりける

のこそ男ふさをあらうとこゝろのこゝろよめふる今ようめ二
ごんのこそあらそめふさすがこゝろのえそかこゝろえれ
うそあらうとあらうとあ家りのれ日こゝ九どそ文ゟ
○綿入りのうけあれうあれうのかこゝろえふ入れてあらうの方
へうにゟのふ二百八十の隅と入れてうそ手ふりそ

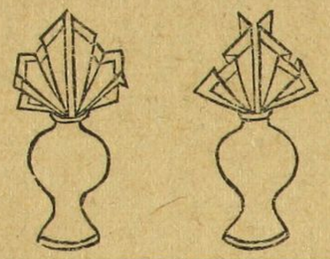
名こん
ちうそ
ふるへ
ちひて
人の命の
あるとそ

いかふ云ふ女房の男
あらうとあ役式ふの
の外こゝのの隅こゝ
九どのあらうとけん
ざんのでくろう
○男入のの二ふ綿
入の格とのそえん
あるくの匹一朝だて
武法あるふ人ふさき
あるふ人及ばごろそ
れふあ一れんそ
ふの人後の男猫の
女のおこ後の乳を
ぶべくんぐ先祖
ふろふこ孫くふい
たるふそ表ふそお

三さん
泰義等
浅茅生の
をの
ふ糸の
ずまど
のまり
おどろ
人ひと



さるゝ所なれバうく
男をまねくうらおべ男
てよのそうさを祝ひ
づゝをふくもおかし
列の次今あるじよを
ぢめてむすび対ろう
おつでゝくりろ

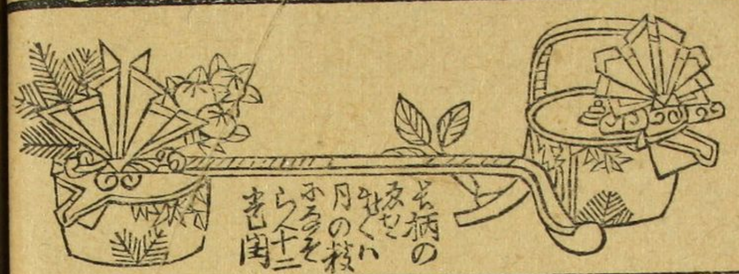


瓶子

女てあのそうさ
を松とたちそゝ
とかんるべのにお
むすび対て祝ひ
引ゐて男てあの
そうりおまべー

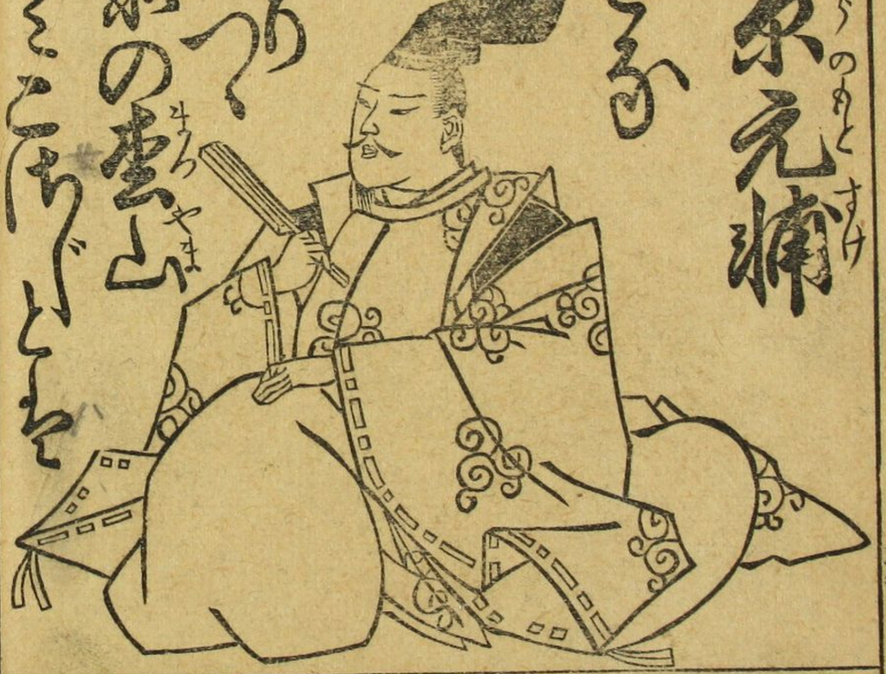
千里の外も忠見
こひ名もそよ
まぐき
ふるよ名り
人まをひそめ
ぐ

探美緒図会



清原元輔

契きなかたみに袖をしぼる
末の松山浪こさじとは



遊菜の蝶

中納言敦忠

逢ことのたえてしなくは
なかなかに人をも身をも
恨みざらまし

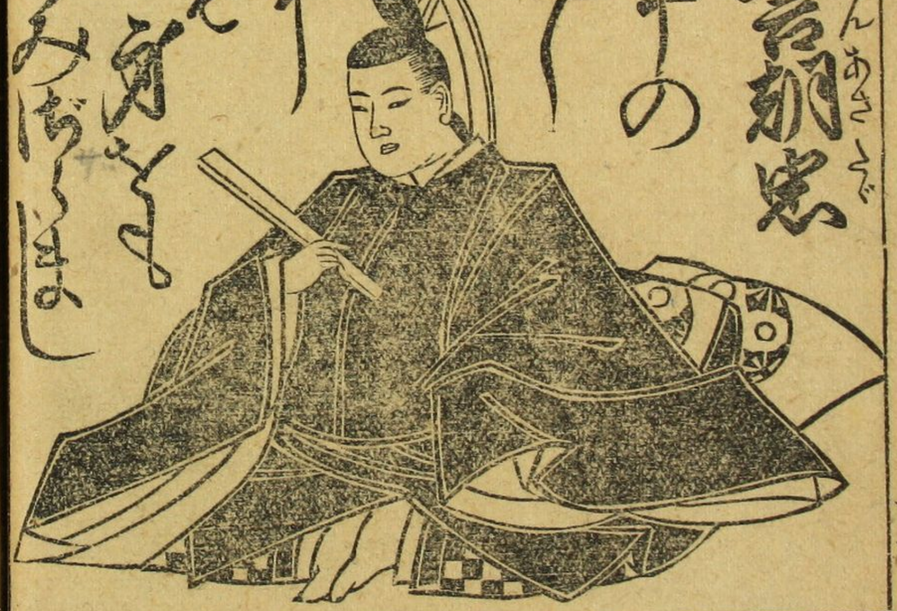
乳猴もの尽

中納言(ちうなごん)忠(ただ)

のき

なく

人(ひと)



まだ十二ひとえという
人のめさる乳猴
まで中人以下
あつて益なき
ものゝ女の乳猴い
ぢらしなどをするを
第一とをしへうる
おうとをを次とも
その外の源じの
乳ふたをもうろ
けの下いひちり
めんたうへ一ぬ
のまうへ四面ちやぶ
あるへ町風れ
つまれへ一ぴきへ
ひとまの猿を

福徳公(ふくとくこう)

[illegible]のやうな[illegible]のれ
さこのやさきをおもて
町方へ用ありけれハ
ゆくゆくへ[illegible]多くの
御ふち[illegible]の給と[illegible]
[illegible]日[illegible]て[illegible]日[illegible]
日ゆくの給と[illegible]
[illegible]月[illegible]日[illegible]
[illegible]月[illegible]日[illegible]
[illegible]月[illegible]日

きりつぼ桐壺

いとけなきほどよりただならずおぼえ給ひしかどよのおぼえいとかろからずもてなし給ひしほどにさるべき御契りやおはしけむきわめて時めき給ふありけりいづれの御時にか女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に

第一きり

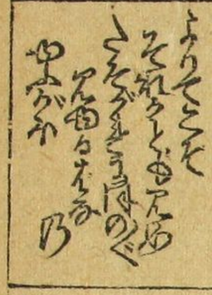
かどとざしたる家多かる中に

名のみ聞きわたる

うつせみの空

うつせみのからをうつせる

あのかたに



ようそこそ

それとはいはでうつゝなの

夕顔

源氏

風ふくと

いそぐうつ

あふさかの

おのをとゞめて

くぐひすの

鳴つるかねの

聞ゆるかな

大中臣能宣朝臣

沖つ白波

清水寺

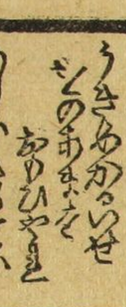
さく

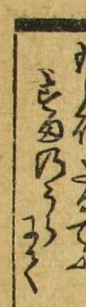
花

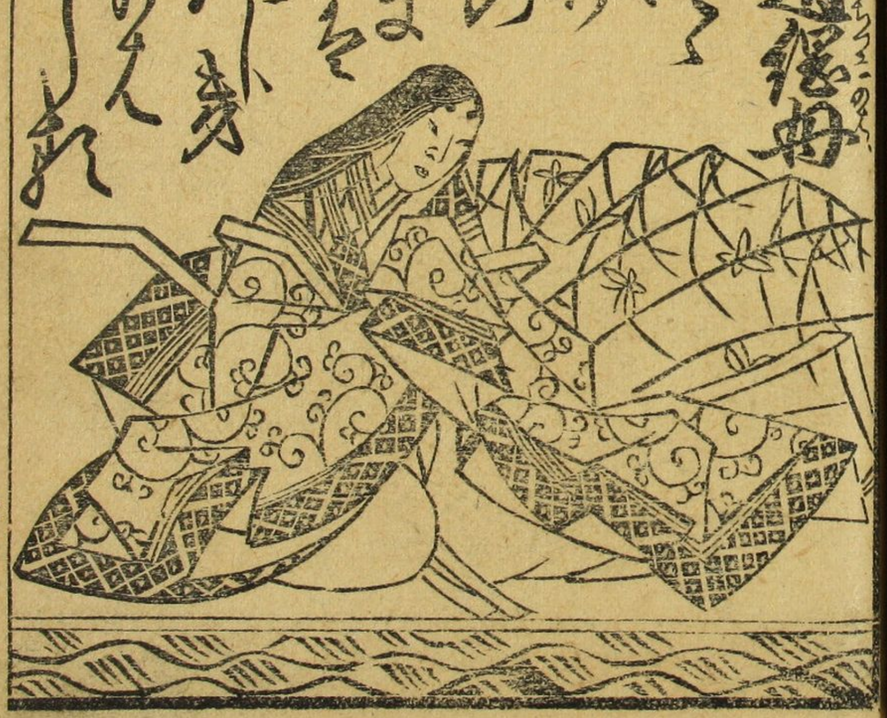
ひるはきて

家をつとえ

相坂の







秋のよの月ばかりぞ
ひさごなる
とものおもひを
なぐさめてまし

かぢをたえ
ゆくへもしらぬ
ほどのまの
あはれとぞ
ながめこしよを

たごのうらに
うちいでてみれば
しろたへの
ふじのたかねに
ゆきはふりつつ

ゆふされば
をぐらのやまに
なくしかの
こゑきくときぞ
あきはかなしき

奥山に
もみぢふみわけ
なく鹿の
こゑきくときぞ
秋はかなしき

かささぎの
わたせるはしに
おく霜の
しろきをみれば
よぞふけにける

大納言
ながひと
卿

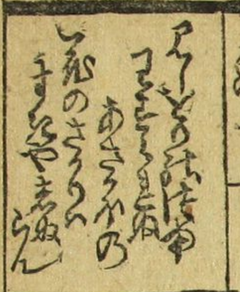
滝の音は
たえて
ひさしく
なりぬれど
名こそ
流れて
なほきこえけれ

うらぶれて
そのゝちは
久しく
ろくに
たよりも
なかりけり

わかれ
路に
立ちて
ひとりの
ながき
思ひは
松ぞ
知るらん

入日さす
峯の
うすぐも
ものぞ
悲しき

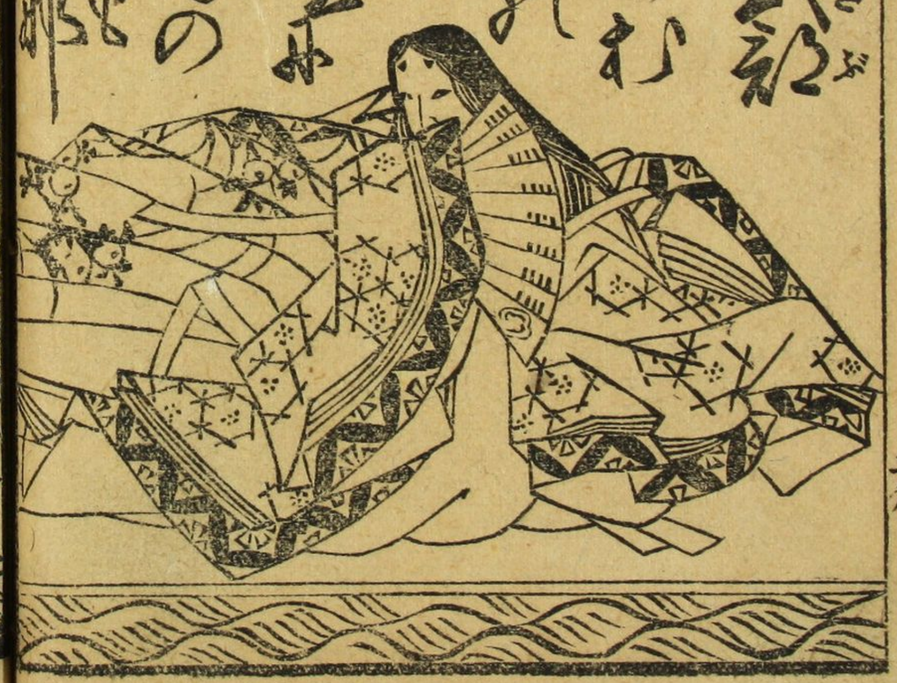
そよ
ろ
いろ
まがふ
ものの
あはれ



そよ
ろ
いろ
まがふ
ものの
あはれ

和泉式部

あらざらん
この
世の
ほかの
思ひ出に
今一たびの
あふことも
がな



和泉式部

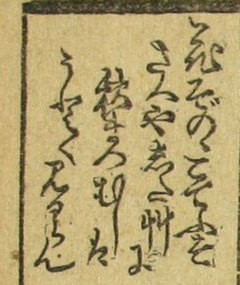
めぐりあひて
みしやそれとも
わかぬまに
雲がくれにし
夜半の月かな

そとものみや
神さび給ひ
まもり神ぞと
よろひたのもしく

こひつつもねむ
そでもぬれじと
もろともにいつる
きぬぎぬの

そでのつゆをも
さそやあらしの
秋ぞうらめし

うらひすも
そろ松ぞまつの

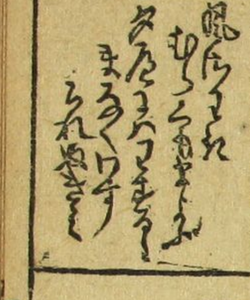


そう日ふまでの
ものを
なく

大ぶみのさんぎ
ありま山
ゐなのゝ
ふけばとよ
そでのつゆも
わすれやはする

赤染衛門

年をへて
花のかゞみと
なる水の
そこの月をも
かすむ春かな



清少納言

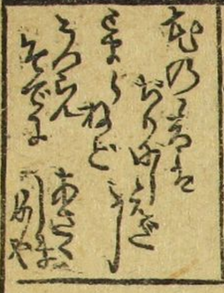
家とこや

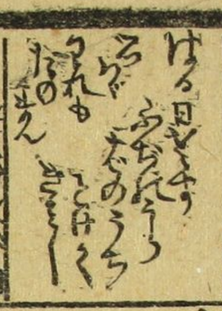
鵆のそもも

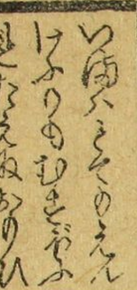
はうるとそ

そたのよ

さろのもち





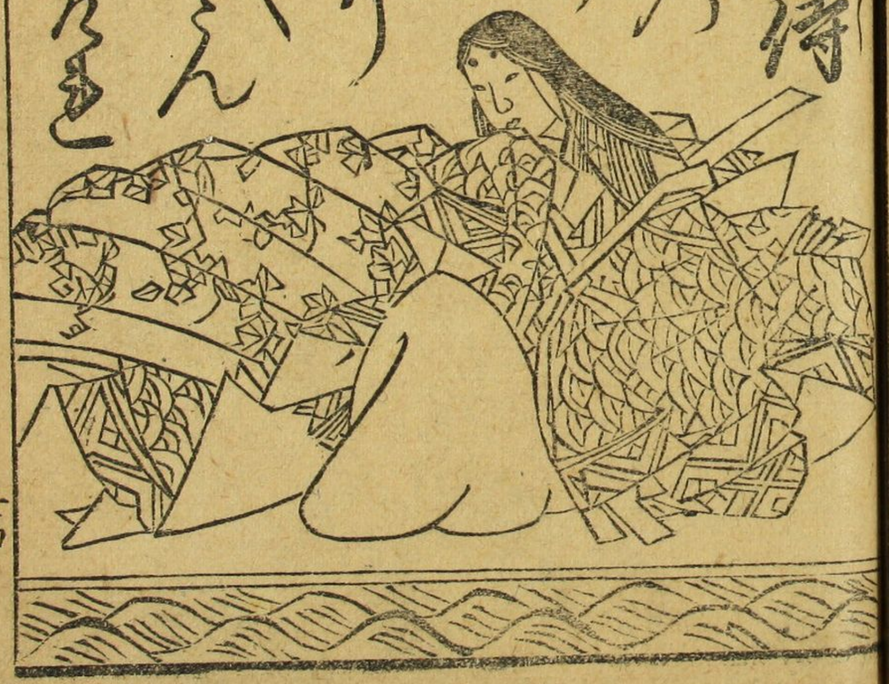


横笛

出

東の方

所の法



幻

大ぞうを
ゆめよじゃ
てんこねこの
ゆるさぐねよ

句

おおつつが
これよこのよ
いつゆえ
てらわもけても
あらぬ風ぞこそ

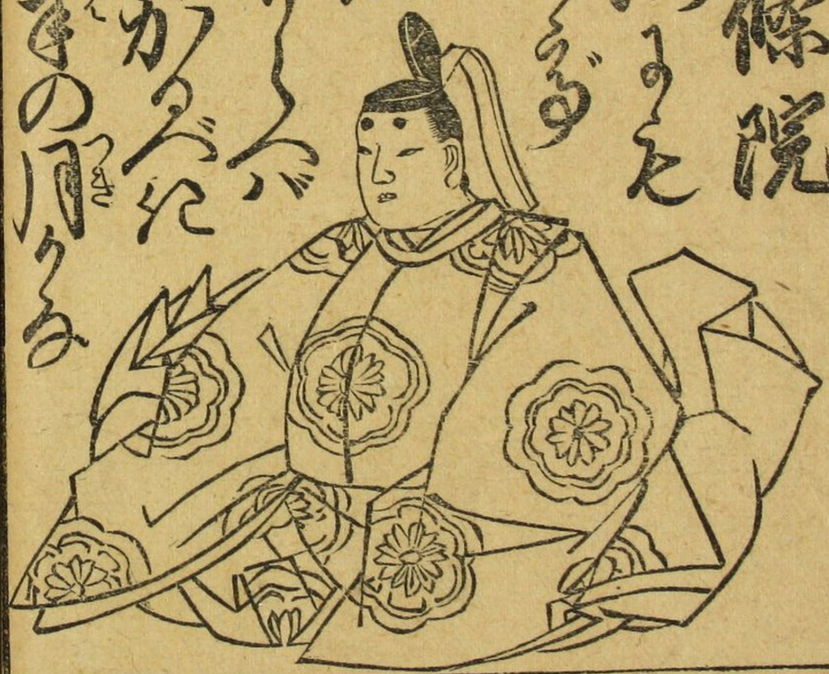
梅

竹川

ちるろおうて
そくよゆうそ
そのこうみを
ろうぐのまの
ここのもあるぐ

なはかのそし
うらふうき
ふうふうき
こころのそとん
あうさや

三條院

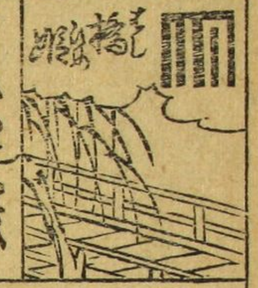


わくごぞ
うきよ
せよ
おぐく

こひ
ゑ
かぐ
ばた
衣まの
ほりうる

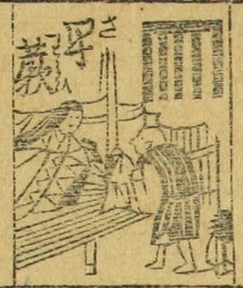
能因法師

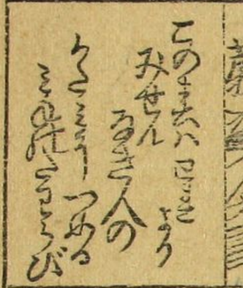
ひのう
三室のふ
もみぢ
葉を
幣とて
の川
みぎわ
ろうろう



まつ橋

志摩が事



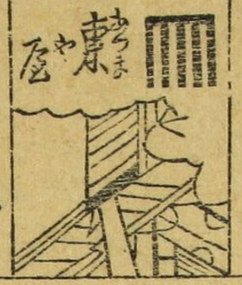


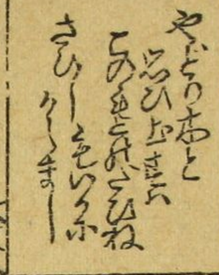
良遷法師

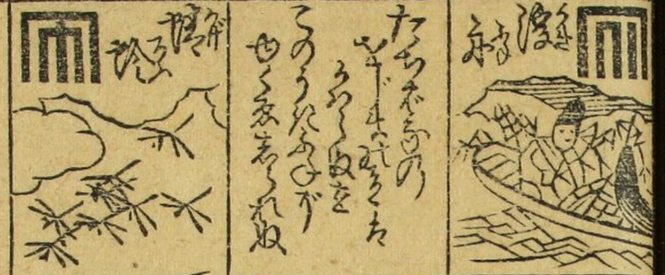
大伴宿禰家持

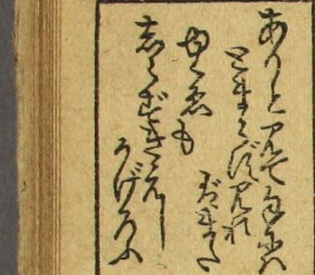
門田乃稲葉

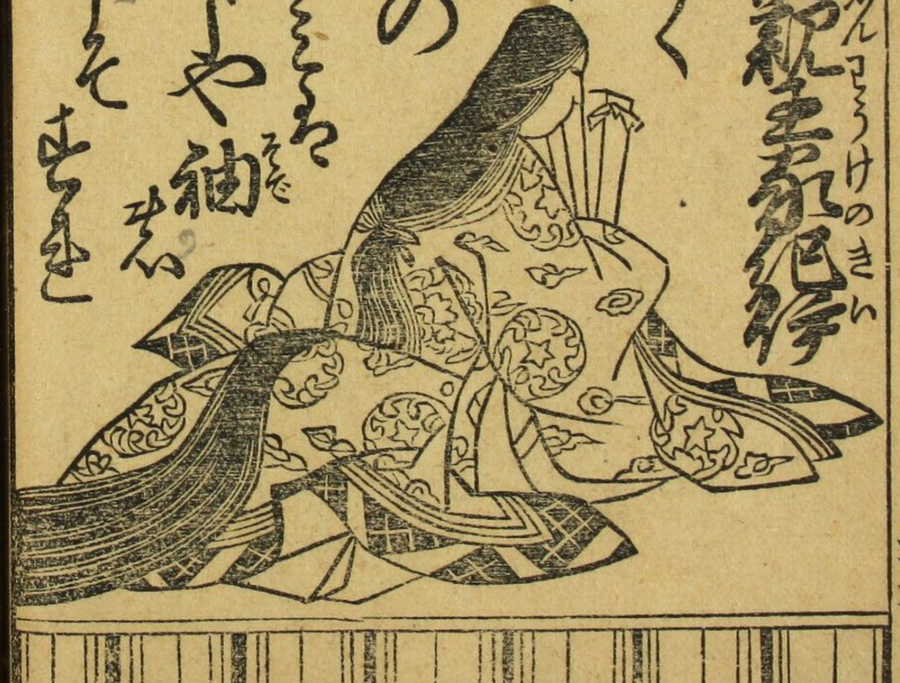
あきかぜふく

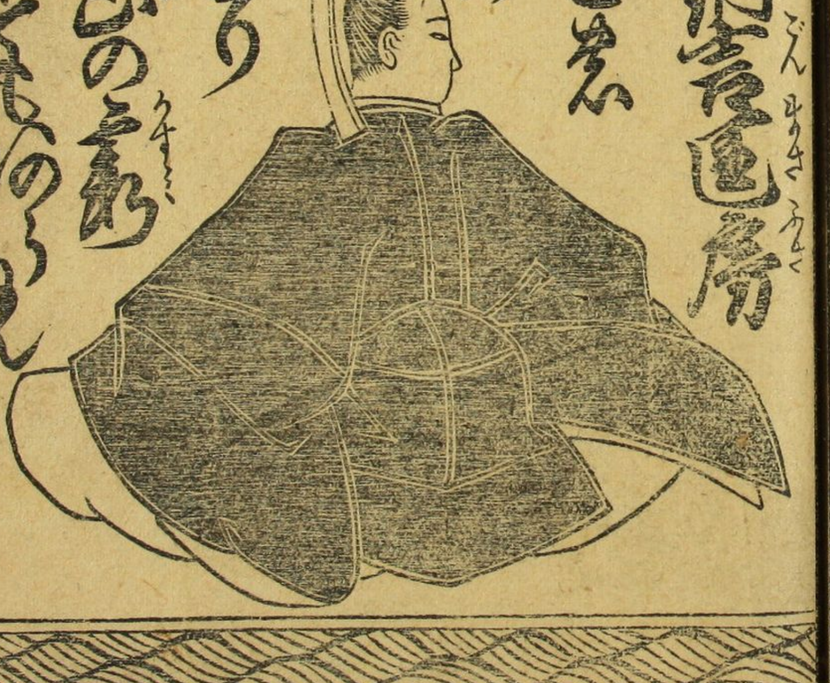












みなもとの

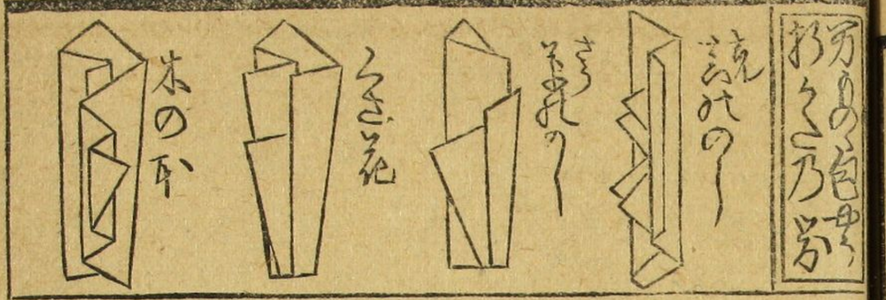
身のたけ七尺ばかりの人の大きさをえがきみたれどもかほ

鎧の袖の

おもてのほうへとふりかへりたるところをうつしたるなり

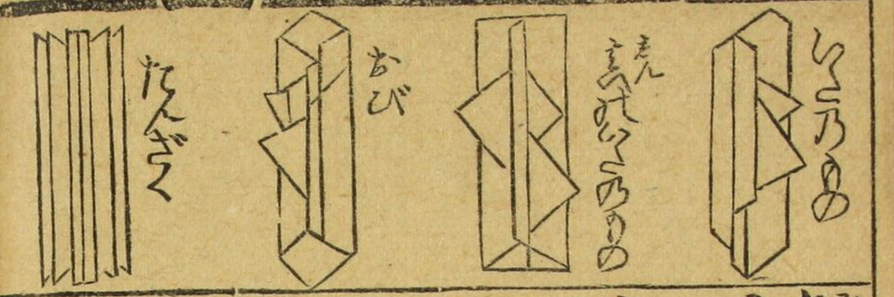
源義経

源義経

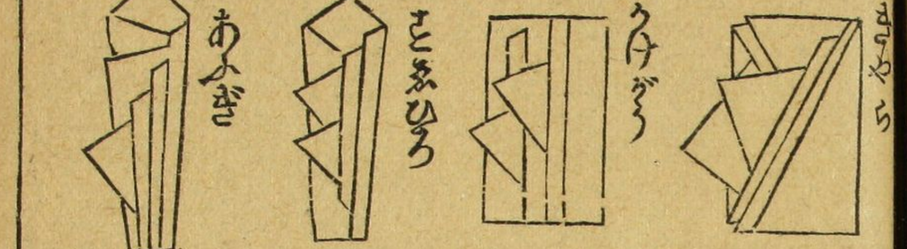


笹竜胆

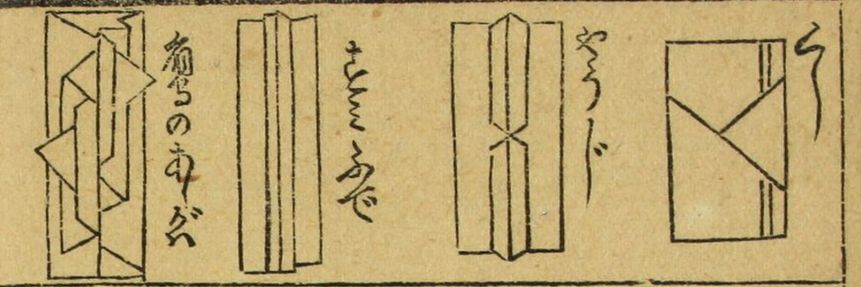
笹竜胆義経



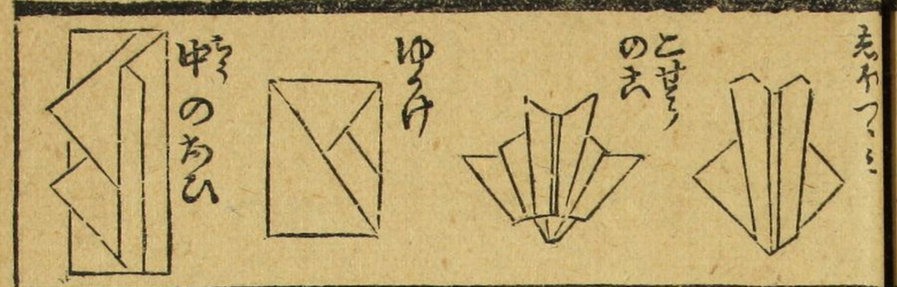
清和源氏関東支流
和田の系
こびき
足まだ
久々
系井
たきろ



常徳院
徳院
清和
せいわ
系
せいの
源氏
げんじ
勝川
かつかわ
これ
多
おお



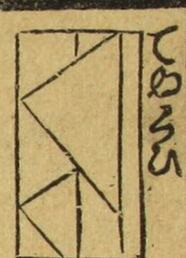
源兼昌
あふ坂の関路の嵐吹ゐよ
ちどりの
なく
あふ
いくよ紅ざわぬ
さ生
須磨の



左京大夫顕輔
秋の
きりぎりす
鳴
たそ
よ
衣
打
なりぬ
ころも

てめらん

それ数多の男女とるそのうちの人のくちをもんとゝゝかゝらまあゝゝるそのうちのるとにこゝをとつけくもむのゝよゝさゝゝ

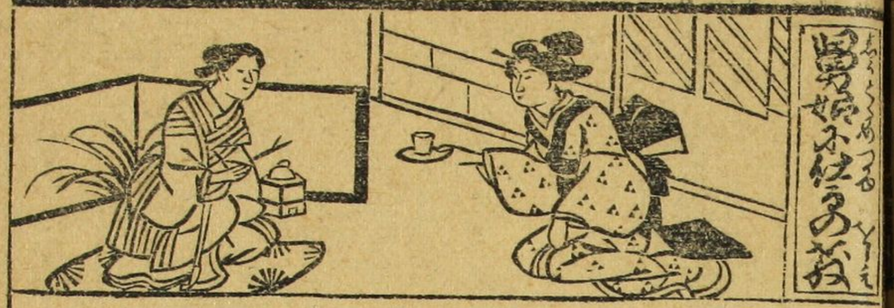


さけ

かつを

父母ふせうの教

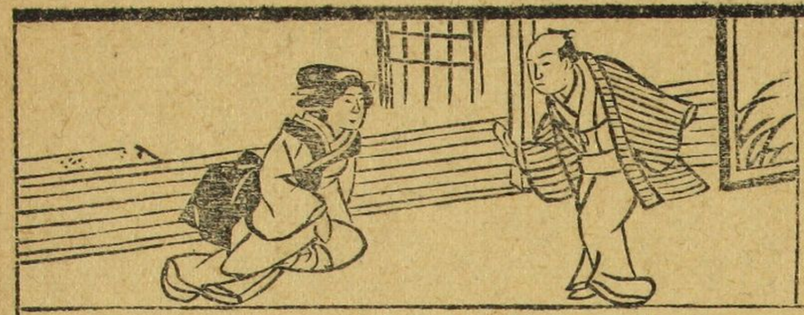
女子は父母ふつくるを引くく綿そつくるれくらいけて若のとろ
つゝべく男子ちゞひ
父母ふのつひをんべ
りんとおくかちゝ
よくおひて父母の名
親と人なうけべ
くうはえて
下半人ほうけて工高
月ごんとそ
ん
個ちて



男女ふ仕うの教

若衆ふ頭剃法師のあそん
なぶ〳〵ばの
まことの
ろろや
ものゝ
もと
ーとん
今ろ
ひお

俊恵法師
萩のはなづ
物ふ
ろろい
ゆやく
風乃
はまあ
ろろ



まの仕うの話

和行法師

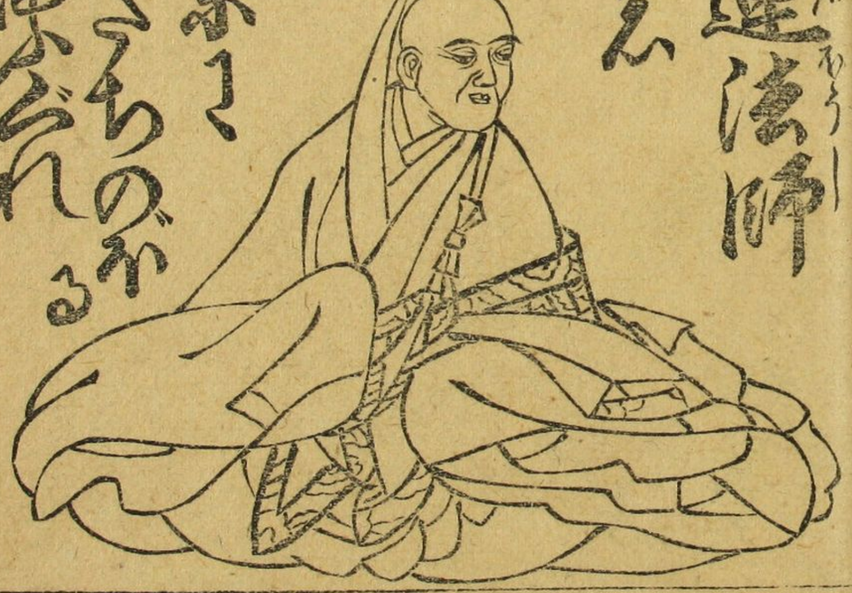
歌けとつきに

月やそのへの

おりへも

さてかのちごかる

ぬるなごろう



舞道法師

村雨もそこ

家もそこ

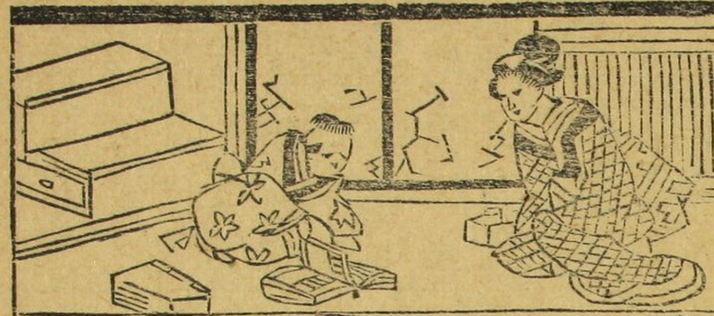
ひぬ

枝のもふ

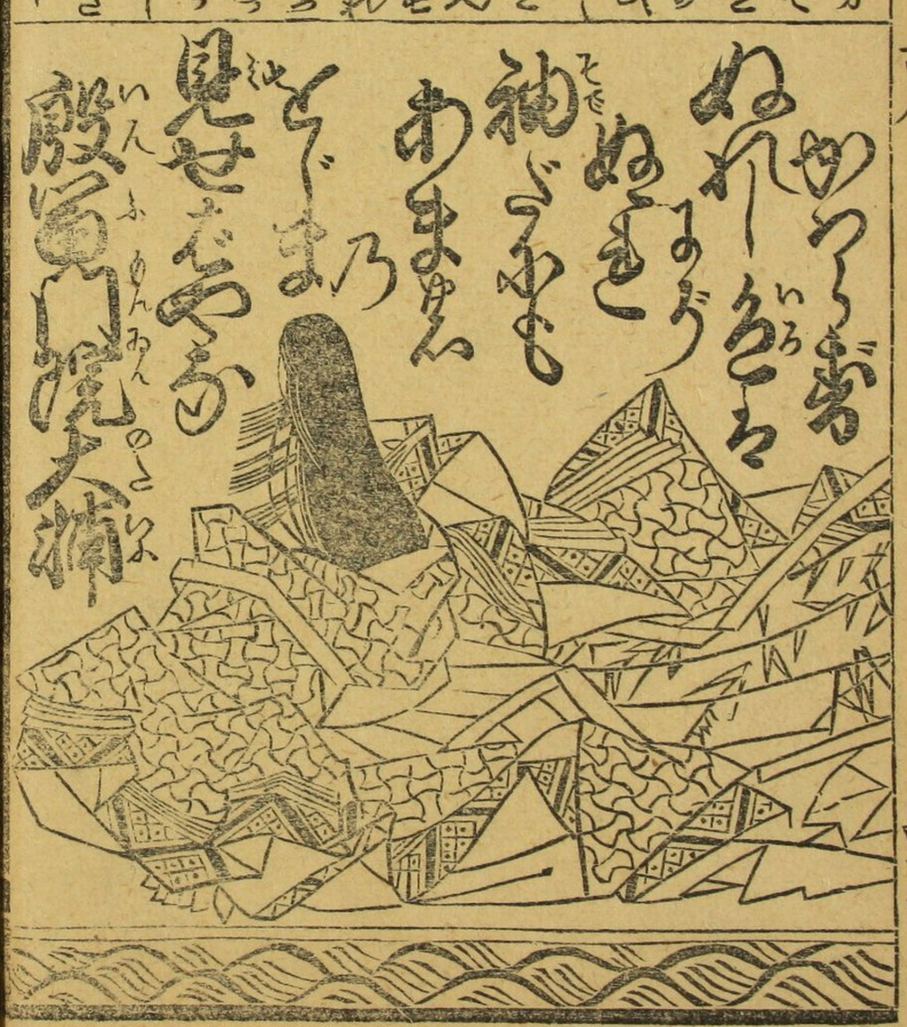
きりさう

秋乃神ぶれ

女房「ハテ今日ハ
どふなりのこゑだか
月のもち
まの
円
宮
ども
とう
人
今
せ
の
ら
ろ
て
う



女子ども六人男子ども六人父母ひとつに
ゐてたのしみあそびくらすこともまた人
とちがひたることのわるいどころかおや
は子のことをもつともよくおもひ子は
父母のことをもつともよくおもひ兄弟
姉妹なども仲よくしたがひあふのが人
道なればかやうにてくらすべきことな
るべし下女下男などもおのおのその人を
そだつるやうにしてくらすべきことなり
されどもとかくこの人間ばかりは
ものごとにあきたりぬるものなれば
ともすればこの上にまだ
なにかほしいとおもふ
ものなり



むすびとまる悰
なのこる雲雀哉
やまとうみさく
かすみ二段霞
おく東江波氏
まそで朝寒み
びと追上ケー
りー袴ク
まつのくゆる
くゆーそうく
ゆそくとく
月遅き

春はあけぬ海と
しそらつゞく
ゆく水さんや
東の春の
方もありそら
そこ路も松や
くれ梅ほの
第六の巻
第六の巻
上りくそら
秋年立とて
おのくをそ

一條院御
袖をそ
おひし
人こそ
かなくめ

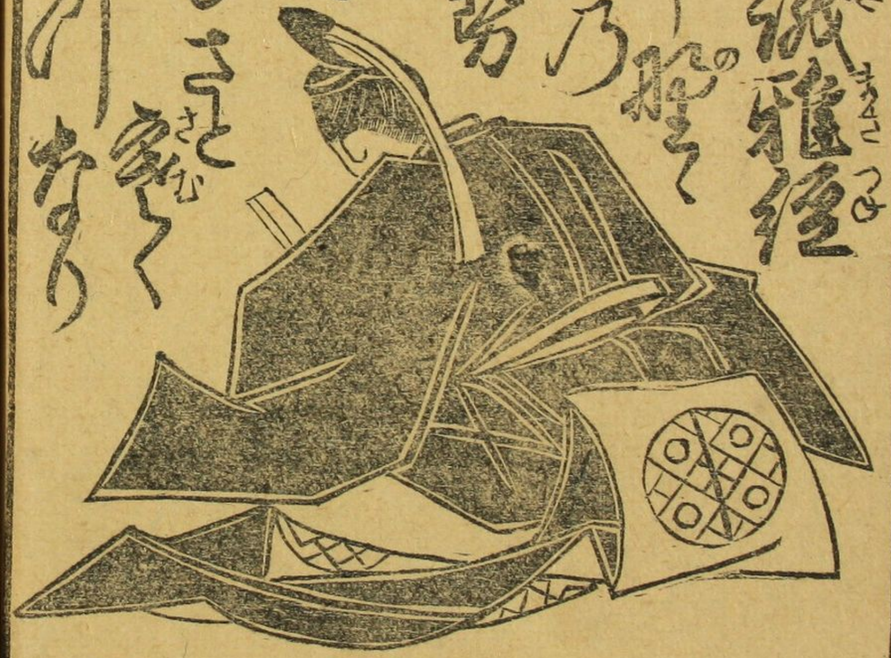
権大納
世中も
つれ
渚
雲の小
生れそ
うぐ

さんぎ　ふんぎょう　ぶんぎょう　ぶんぎょう

三行分行文行

みよりの松のさよ

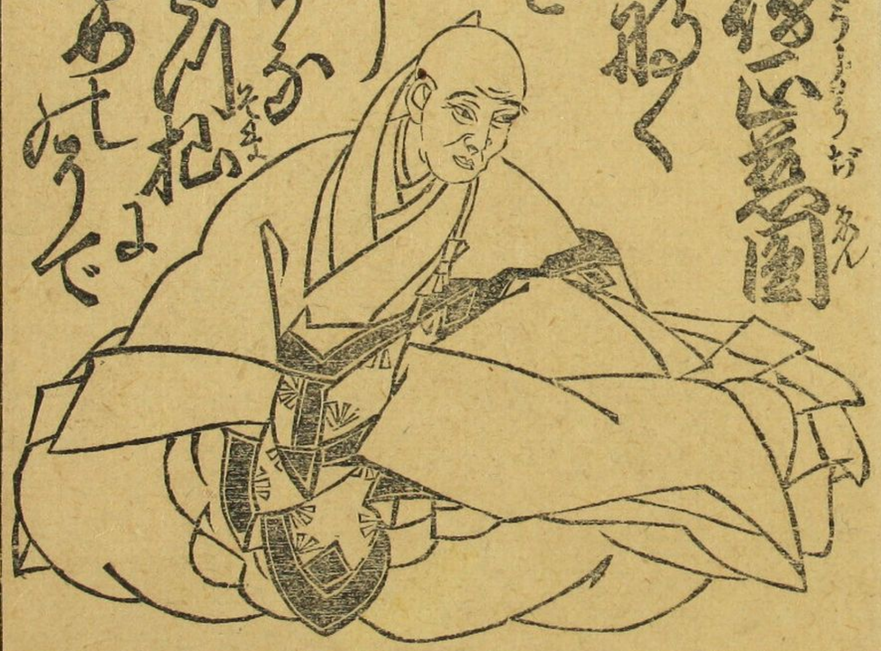
ふけてゆくさえ名うり



さんぎのぶんぎょうぶんぎょう

三行分行文行

新大橋の図



よのなかの

世の人々

松のうらふく

ことの葉ぞ

ふんぎょうぶんぎょう

分行文行

ふたりづれ

二人連の図

よもやまの

四方の雨やみ

ふくものがたり

さてもよき

ぎんみせ

銀見世

ぎょうぶんぎょう

行文行

みうりの

見うりの

ふんぎょう

分行

ぶんぎょう

文行

ぎょう

行

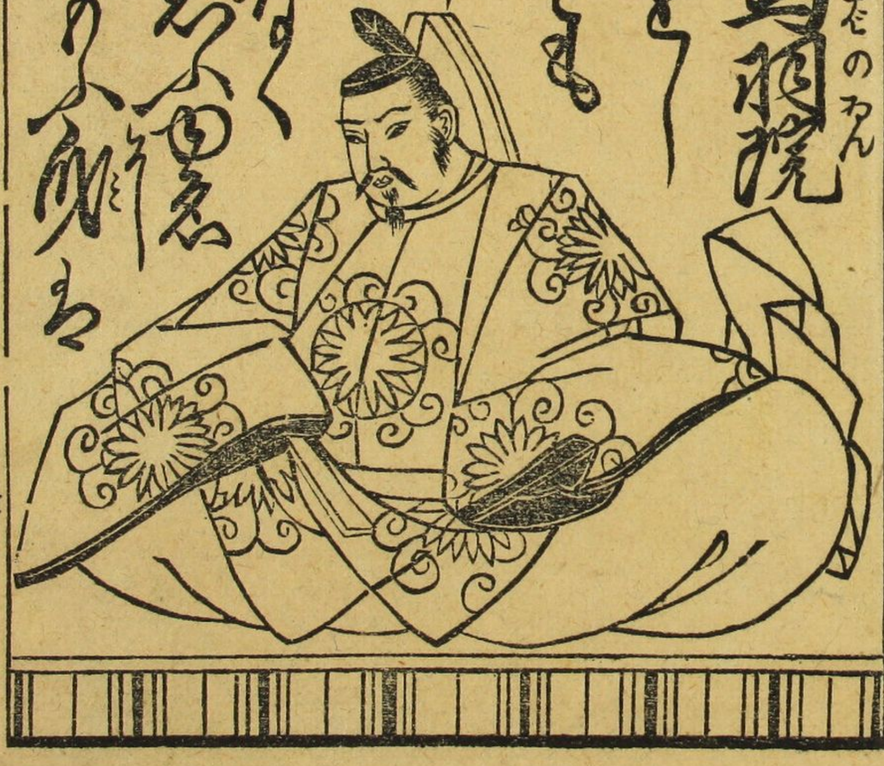
入道左大臣藤原朝臣道長公

権中納言定家

仰ぐ吉月の
空を色いろ
つくめつく
とし
上巳の
祭くみてそ人
のり物の道
笑ひ声めつら
敷ん北野の
ほうへ
ほうの御霊
祭りの一番乗
屋ふね

正三位
風雅をよく
るの
小町
かぎりと
ハ
声後
ちるの
家隆

り
線香
よれの
春の
ちく
中上
日返事
ひみ有
のく
これ
雪空
霜の
黄八



後鳥羽院
人
もも
うめ
あぢ
世を
物

順徳院

百人一首

ももしきや
ふるき軒端の
しのぶにも
なほあまりある
むかしなりけり

明治三十六年拾二月一日印刷
明治三十六年拾二月拾日發行

東京市日本橋區馬喰町三丁目十五番地
著作兼發行者　荒川龜次郎

東京市本所區緑町四丁目二十二番地
印刷者　田中仙太郎

發行所　馬喰町三丁目　山口屋書店

不許複製